

市民自治あかし 2022 年度活動総括 (案)

<前文>

2023 年の年初は「この春 明石が冴える」と朱書きで大書した市民自治あかしのニュースレター 77 号 (2023/1/10 発行、カラー版) で明けた。統一自治体選挙の年へ向けての「市民マニフェスト選挙」の意気込みを示したものだ。4 年前の統一選年初のニュースレター 39 号のキャッチコピーは「いま明石が面白い」(2019/1/20) だった。この時も、まさか 10 日後に泉市長が「暴言辞職」し 2 回も市長選をやることになるなど、夢にも思わなかった。今年も、2 回目の暴言責任を取って退任するかもしれないことから、波乱を呼ぶ選挙になるかもしれないとは予測していたが、まさか「正真正銘の市民派市長」の誕生になることなど想定外の範囲外だった。

3 月 25 日に泉氏の後継指名を受けた丸谷聡子氏が立候補表明したあと、1 ヶ月足らずの選挙へ向けての動きは、まさしく怒涛のような展開だった。その動きは、4 月初めから選挙結果が出るまでの 1 ヶ月足らずの間に、選挙支援活動の傍ら「論評・2023 明石市長選挙」を 8 回にわたって同時進行ドキュメント風に発信した通りだった。この中で「市民自治の明石市政」が、文字通り「第 2 ステージ」に入ることを宣言した。

この 1 年を振り返ると、昨年 6 月の第 10 回総会で活動方針に掲げたように、統一選へ向けての「泉市政 12 年の検証」と選挙へ向けた新たな「市民マニフェスト」の策定に始まり、その実行過程に奔走する日々だった。この時点では、おそらく泉市政の実質 4 選目をめざした再出馬と、それを阻止しようとする反対勢力の対決選挙になるものと予測していた。市民自治あかしの関心は、そうした「対決の構図」ではなく、自治基本条例に基づいた「市民自治の市政」がどのように進展するのか？ にあった。

そのために、市長を招いた「市民マニフェスト検証大会」を開く前に、12 年の泉市政を振り返る「泉市政のマニフェスト検証討論集会」を 8 月に開催し、検証への目線についての市民的合意を見出そうとした。

このころすでに、市議会多数派と泉市長との対立はピーク状態に達していたが、まさか 2 か月後に再度の暴言騒ぎが持ち上がり、即座の退陣表明と選挙対決へとヒートアップしていく展開になるとは、想定を超える動きだった。

ここから先は、「論評 2023 明石市長選挙」の冒頭に整理したように、半年に及ぶ 3 幕構成が以下のように展開していった。

- ①第一幕：議会多数派による「市長問責決議案」提出の動きの中で、泉市長による市議への暴言騒ぎが発生し、10/12 の市議会本会議で間髪入れず「任期末の退任と政治家引退」表明になった。
- ②第二幕：11 月に入って議会多数派との対決を標榜する泉市長が、泉派市議の擁立を表明し候補者公募、年末には 6 人の市議候補の擁立を発表し自らが先頭に立っての街頭活動を開始する。年明けにはうち一人を県議選候補に振り向けるとともに、市長後継候補については“だんまり”を続けて泉氏自身の再出馬への“疑念”が募る中で、3 月初めには自民党側が市議の擁立を先行させた。
- ③第三幕：3 月議会が 24 日に閉じるまで後継指名について口を閉ざしていた泉市長が、24 日の本会議終了時から口を緩め、後継候補についての支持者への説明を始めて、一気に選挙構図が広がった。翌 25 日に市長とともに丸谷氏が記者会見に臨んだが、こうした“サプライズ指名”がその後の選挙の行方も決定的にしたことは間違いない。

いま、私たちが立っている「市民自治の明石市政 第 2 ステージ」とは、どのようなものなのか。それは「第 1 ステージ」やそれ以前の市政を振り返る中で、これから明らかにしていく課題でもある。本当の意味で、市民が主体になった「市民自治の市政」のモデルが現実存在するわけではない。市民と市長、議員と職員、市政を担うあらゆる主体が協働して、これから見出ししていくことになる。

1 市長、市議選の取り組みと総括

新年度早々から、統一選やマニフェスト検証大会見据えた取り組み開始

2023年春の市長市議選を見据えた取り組みは、昨年6/19の総会直後から始まった。7/12の世話人会では、さっそく泉市政の「第3次市民マニフェスト検証」への取り組みについての協議を開始し、市長に出席要請と日程調整を始めるほか、秋の検証大会へ向けた「討論集会」(拡大世話人会)を8月に開催することを決めた。また、すでに7/30に開催を決めていた第34回市民まちづくり講座のテーマ「選挙の低投票率は何をもたらすのか? 地域自治への課題」も併せて、翌年春の統一自治体選挙を立体的に取り組むことも確認した。

泉市政をどう見るか? 市民マニフェスト検証大会へ向けての討論集会 8/27

泉市政の市民マニフェスト検証大会へ向けて、前回2019年市長選(4月無投票当選)における唯一の候補者であった泉市長を招いた公開討論会の質問と回答を振り返り、その後の3期目の市政の検証を始めたが、検証の土俵を広げようと8/27に討論集会を開催した。この種の集会への多くの参加は期待できないことから“拡大世話人会”のつもりで呼びかけたが、参加者は世話人10名のほかりピーター5名と初めての参加者2名の17名にとどまった。

参加人数はともかく、討論に備えて用意した①泉市政12年の足取りと1~3期目の特色 ②政策検証の3つの観点 ③2020~22年度の3か年の市民自治あかしの総括に見る泉市政3年半の論点 ④泉市政12年の足取り年表—の資料は、その後の検証作業に大きく役立った。

また、延べ17名から発言があったが、その発言の論点は多岐にわたり「泉市政の光と陰」を具体的にあぶり出した。

(1) 泉市政の検証大会への取り組み

11/20 検証大会前に“4選不出馬”表明、開催も危ぶまれたが出席確認し開催へ

検証大会の日程は9月初めには11/20と確定、アスパア明石で最も広い704号(120人)を確保した。この日程へ向けて検証項目と質問項目の絞り込みに全力を挙げた。2019年4/13の公開討論会で提案し意見交換した第3次市民マニフェストへの泉氏の答弁を読み返し、その後の市政の中でどのように展開されたのか、されなかったのかを一つずつ検証し、項目数も絞り込んでいった。

当初は9月末には質問項目を取りまとめ10月上旬には提出する計画を想定していたが、9月末ごろから市議会多数派による市長問責決議提案の動きが始まり、これに絡んで10月初めに市長による市議への暴言問題が発生。10/12の本会議で問責決議が可決されると同時に、市長は「今任期末での退任と政治家引退」表明が飛び出した。

こうした局面下で、一時は検証大会への出席も危ぶまれ大会中止も視野に入れ、「これからの明石市政を考える会」への切り替えも検討した。4年前の暴言辞職で検証大会が吹っ飛んだ悪夢もよみがえったが、慌ただしい状況の中で市長サイドとの折衝を重ねた結果、10/20には予定通り市長が出席することを確認し、11/20の検証大会は予定通り開催へ向けて準備を進めた。11月初めには質問項目も確定し、11/7には市長に提出し、検証大会の準備は最終段階に入った。

ただ、任期末で退任表明した泉氏は11月初めには、市議会の自・公勢力を過半数割れに追い込むために、後継市長候補とともに市長支持派の市議を5人ほど擁立し、自ら全面支援することを表明し自・公多数派と全面对決する姿勢を鮮明にした。明石市議会の病巣は「自公による絶対多数派の支配にある」という認識を明らかにし、市長・市議選の構図が明確になってきた。

検証大会は“闘志むき出し”に2.5時間の熱弁、会場を圧倒

迎えた検証大会は泉氏の言動が注目される中での開催のため、超満員の参加者やテレビなどのマスコミ取材の混乱も予想し万全の態勢で臨んだが、参加者は66人とどまった。ただ、初めての参加者が30人を占め、日曜の夜の開催という条件が影響したものと伺われた。

肝心の意見交換の中身は、予定時間を20分ほど延長するほど熱気をはらんだやり取りが行われた。

討論会の内容はHPにアップした録画で確認いただくことにするが、一般参加者20名から寄せられたアンケートの回答をざっと紹介、記録しておきたい。ほぼ全員が討論会について「良かった」と回答し、「持続的な提案検証のもとに市長とも忌憚ない意見交換が行われていることに感銘した」「大変エキサイティングだったが、市民と市長がこんなに率直なやり取りができている市があるなんて!」「真剣な討論で課題や実態がよく見えた」「市長の本音が聴けて良かった」「政策ごとに論点も一定程度深まった」「今日の議論を多くの市民に聞いて欲しい」「市民マニフェストを通じて市政を理解し、一定の未来像を持ってアプローチしていることがよくわかった」と、肯定的な感想が大半だった。泉市政への評価や市民マニフェストの内容についても、一定の理解が得られたことも伝わってきた。

また、この検証大会に参加したことをきっかけに、複数の人たちが市民自治あかしの世話人会等に参加するようになり、居住地周辺での独自の活動を始めていることも大きな成果だった。

(2) 市議、市長選の公開討論会への取り組み

市議・市長選の候補者公開討論会の取り組みが12月からスタート

12/9の世話人会では検証大会の総括的な議論を行うとともに、早くも年明け3月の市議、市長選の候補者公開討論会の準備を始めた。この時点ですでに、市民会館中ホールなど大きな会場の空きが少なくなっており、会場の確保を優先させる必要が出てきたからだ。とりあえず、市議選の公開討論会を3/19(日)または3/21(祝)の夜の時間帯に市民会館中ホールで開催する方針を決めた。すでに土・日・祝日の昼間の時間帯のホールは空きがなかった。

市長選の候補者公開討論会の会場押さえと日程は、さすがに候補者の見通しが全くつかないこの時点では困難と、先送りした。

また、この時点で、1/28(土)午後、「市議会改革を考える市民と議員の討論集会」を開催することも決めた。年明け早々にニュースレター77号のフルカラー版を発行し、春のトリプル選への呼びかけを開始する段取りをつけた。泉派「明石市民の会」の参入もあって、今回の市議選はすでにこの時点で40人を超える乱戦になることが見通され、前回に続いて2回目になる公開討論会の開催とともに、市議会改革へのアプローチが再度必要であるという認識になったからだ。

「この春 明石が冴える」市民自治めざし3つの選挙へ発進

新年早々1/4に印刷発注したニュースレター77号カラー版(1500部)は「この春 明石が冴える」と大書し、「市民自治めざし3つの選挙へ」取り組むことを発信した。4年前の年明けも似たような体裁のカラー版を印刷したが、この時のキャッチコピーは「いま明石が面白い」だった。まさか、ニュースレター発行後10日も経たないうちに、市長の職員への暴言が大きく報道され、間髪入れず辞任するなど文字通り“晴天の霹靂”だった。

今年はとくにそのような波乱を予測したわけではないが、10月に泉氏が公言した通り退陣し、新たな市長が12年ぶりに誕生することになれば、自治基本条例施行後二人目の市長が登場することになる。そうした新たなステップを踏むことに4回目を迎える「市民マニフェスト選挙」が役割を果たせるとしたら、新たな展望を見いだせるかもしれないという期待を込めたことは間違いない。また、泉派市議の大量擁立が「自公による多数派支配」の病巣を切り崩すことになれば、市議選とその後の議会が大きく注目をされるかもしれないという期待もあった。

新年早々1/9に開いた世話人会では、そうした選挙情勢の分析を深めるとともに、第4次市民マニフェストの策定作業に取り掛かった。前回2019年版を参考に、今回はさらに絞り込んだ簡潔なものに仕上げることにし、1月末までに「原案」をまとめ2月に3回の討論市民集会を開いて、最終案を

まとめる方針を確認した。この時点ですでに4つの骨格案をたたき台として議論した。すなわち

- ①市政の基本姿勢
- ②議会との関係を改善、改革する
- ③中長期的な財政見通しと計画の透明化を図る
- ④新庁舎計画など、いくつかの個別政策のリストアップ

また、年末締め切りで月刊誌「住民と自治」を発行している自治体研究社から「市民マニフェスト選挙」についての執筆依頼を松本が受けて、2月号に上梓した。市民マニフェスト選挙の始まりから12年間の経緯やねらい、市民自治のまちづくり運動における役割等についてまとめたもので、今春の統一地方選との関係も記述した。出版と同時にコピーを2月初めにまとめた「市民マニフェスト原案」に参考資料として刷り込み、市民討論集会で配布した。市民マニフェストを主軸にした市民自治の政策提言の取り組みを周知するテキストとして役立った。

(3) 第4次市民マニフェストの策定

市長選の候補者見えず泉氏再登板の観測も強まる中で、マニフェスト策定作業が進む

「年明けから後継市長候補の公募を始める」としていた泉市長はその動きを見せず、対立陣営や庁内では「再登板」の観測も強まる中で、対立候補の人選も難航していた。場合によっては、候補者が出そろうのは選挙直前までもつれ込む可能性も視野に入れて、市長選挙の候補者公開討論会は会場確保の都合から3/26(日)夜の中ホールを予約した。2/8開かれた市選管の市長・市議選立候補予定者説明会には、泉市長自らが「候補者未定」のまま出席し、驚かせた。

市民マニフェストの策定作業は1/19には「素案」まで進み、1月末の原案公表を前提に2/12(アスパア明石)2/18(大久保市民センター)2/23(魚住市民センター)の3回にわたって、討論市民集会を開くことを告知した。討論集会は3回で延べ42人が出席し、多岐にわたって意見や提案が出された。

2/28、3/11の2回にわたる世話人会での議論を経て、第4次市民マニフェストは原案を大きく修正し、3/13に発表した最終案には、総合前文に次いで「人口縮小社会における明石のまちづくりへの道筋」と題した前文を付け加えた。それぞれのマニフェストの項目や表題はかなり修正加筆したうえで、「市長と議会、職員との関係改善、改革について」には新たに「チーム明石の総力を発揮できる市長と職員の関係を構築する」項目を追加した。また、第4の柱になる「循環型社会をめざした政策について」でも、冒頭に「世代を超えて、互いに支え合って暮らせるまちづくりをめざす」を追加した。前文の「人口縮小社会」に対応したFEC自給圏構想の実践などの具体的提案を盛り込んだ。

総合前文に記載した以下の提案は、今春のトリプル選挙の意義を強調し、新たなステージへの展望を含んだものだった。

「市長も変わる、議会も変わる」という明石市政は、どうあるべきか？ 「市民自治の市政とまちづくり」の推進を掲げた自治基本条例を施行して14年目に際して、市民自治あかしは4回目の市民マニフェストをつくり「市民がつくる市民の政策」を市議、市長選の候補者に提案します。

(4) 市長選の候補者めぐる動きと2つの公開討論会の開催

立候補表明した自民・林健太氏との協議で、市長選公開討論会は3/29に変更

泉市長の“再出馬”観測が見え隠れする中で、対決を挑まれた自・公陣営は候補者の擁立に難航していたが2/5、通常国会開会中の経産大臣の要職にある地元選出の西村康稔衆院議員が地元の県議と市議を集めた会合のあと記者会見し「自民党明石支部から市長候補を擁立する」と発表した。だが、2月末に神戸新聞が報道した林健太市議が3/7に立候補を表明するまで1カ月余もかかった。泉氏の再出馬になるかどうかの見定めがつかないこともあったが、どうやら、その後の県議選で6期目をめざして落選した県会議長経験者の松本隆弘氏が市長選出馬を画策し、陣営内で候補者決定が難航したのが真相のようだ。

林氏の立候補表明を受けてさっそく、3/9に本人に面会し公開討論会への出席を要請したが、予定した時刻にはすでに集会を設定済みであることが示され、やむなく会場の空き具合を確認のうえ5つの候補日を提案し、本人が「現時点では空いている」とした3/29(水)夜に延期することを決定した。出馬表明した候補者との日程調整を優先するしかなく、その後立候補表明が予想される泉陣営と中川暢三氏には事前にこの日程を周知し、調整してくれるように要請した。

なお、この時点で泉氏は候補者の発表は県議選後の4/10以降になるという考え方をSNSなどを通じて流していたことから、その時期の出馬表明は「事実上、公開討論会はずし」になり、自治基本条例の趣旨に逸脱し認められないことを陣営サイドに申し入れた。また念のため、県議選中の市長選候補者公開討論会の開催(4/1~8)が可能かどうかについても市選管に照会していたが、選管からは「公選法上、問題が多い」と避けるよう回答があった。

また、3月初めになって市障害福祉課に市議選と市長選の公開討論会への手話通訳および要約筆記の派遣の可否を打診し折衝したところ、前回4年前に続き市の費用負担で派遣してくれる快諾を得て、2回の公開討論会で支援を得た。

市議選公開討論会は3名が当日欠席し出席は9名、会場の参加は52人

3/19の市議選候補者による公開討論会は、2/27時点での立候補予定が判明した47人に案内状を出したところ、最終的に12名の出席を確認し当日の配布資料に12名(現職6名、元職1名、新人5名)の出席予定者名簿と、日程の調整がつかなかった等の欠席理由の返信があった候補予定者6名からのメッセージ、および欠席理由等の記載のないままの欠席返信者5名の氏名や党派等の所属を記載した。

ところが、当日になって体調不良等の理由から3名の欠席が生じ、結局討論会に出席したのは9名にとどまった。前回2019年並みの12名の出席を想定したステージを設定していたが、人数的にはやや寂しい討論会になった。

12人が出席した前回2019年は公明党は出席しなかったが、当時の自民党真誠会からは現職と元職の2名が出席したほか、保守系新人も2名が出席していた。今回は公明は出欠の返信もなく、自民は一人だけが欠席の返信をただけで、事実上“ボイコット”に近い対応だった。また、維新からは5名のうち2名から欠席の返信はあったが、前回は大幅に上回る候補者数になったにもかかわらず、参加は低調に終わった。

また、会場の都合でやむを得なかったが、日曜日の夜という設定が、会場参加者が52人に終わった要因の一つになっているという指摘もあった。

市議選の公開討論会に出席した候補予定者(敬称略)

◇現職

竹内きよ子(かがやきネット)
辻本達也(日本共産党)
丸谷聡子(かけはしSDGs)
吉田秀夫(かがやきネット)

◇元職、新人

中西礼皇(無所属・元職)
山中裕司(明石市民の会)
金尾良信(明石市民の会)
すみ和馬(日本共産党)
岩本博吉(参政党)



市議会改革については、1/28(土)午後には市民会館で開催した「市議会改革を考える市民と議員の討論集会」は、議員からは現職3名(辻本・共産、吉田・かがやき、丸谷・かけはしSDGs)と元職1名(中西礼皇)の4名の参加にとどまった。会場の参加者は40人とまずは盛況になり、議論の中身も充実した内容だったが、現職全員とその時点で判明していた新人等にも案内したが、新人は一般

参加と同じく会場参加にしたこともあって数名の姿が見られただけだった。

(5) 市長選公開討論会はまたしても自民系はドタキャン

泉氏の後継指名に丸谷市議、対抗する林候補は討論会拒否し、中川氏と2名の討論会に

3/24 の市議会閉会と同時に動き出した泉氏の後継者指名の展開は、一般には想定外の丸谷市議指名になり、選挙戦を意識した駆け引きの渦に公開討論会も巻き込まれた。

極秘裏に進んでいた「後継者指名」の動きは、3/24 の市議会閉会直後に泉氏が囲み記者会見の中で「今日これから支援者等への説明を始めるので、いずれ皆さんにも分るでしょう」と自ら漏らすような形で始まった。その日のうちに有力支援者への取材から丸谷聡子市議への指名報道が始まり、翌3/25 の両氏の記者会見で立候補表明に至った。2月末から政策パンフなどをSNSで公表し市長選への出馬をほのめかしていた中川暢三氏は、これよりひと足早く3/23 に正式に立候補を表明しており、市長選はここに3氏で争われる構図が確定した。

直ちに3氏に3/29の公開討論会の進行手順と市民マニフェストに基づく質問票を届けて、公開討論会の準備万端を整え当日

を迎えた。ところが前日になって、林健太氏から電話で「質問内容が特定候補に有利で、公平性を欠く」という理由を挙げて欠席する旨の電話があった。当方からは見当違いの理由であることを説明し翻意を促したが、聞き入れられなかった。市長選挙での候補者公開討論会は2011年以来5回目だが、自民党系の候補者が直前になって出席を取りやめたのは2011年、2015年に続いて3回目であり、立候補表明した当初から“欠席の伏線”を張るような対応をしていたので、想定範囲内の欠席でもあった。

この件については討論会終了後の4/4のニューズレター82号で「林健太氏の討論会欠席についての市民自治あかしの見解」を公表し、基本的に市長にはふさわしくないと指摘した。

林健太氏の討論会欠席 市民自治あかしの見解

市民自治あかしの「市長選挙立候補予定者による公開討論会」は、市民が望む政策を実行できる市長を有権者市民が選択するための判断材料を得るため、2011年から5回にわたって開催してきました。前年から議論を重ねて準備してきた「市民マニフェスト」を年初から原案にまとめ、2月に3回にわたって市民討論集会を重ねて、3月初めに最終版を発表してきました。

今回の場合は市長候補が一人も手を挙げていない時点で最終版をまとめて発表していたから、欠席理由に挙げる「特定の候補に有利な質問」という批判は全く当たりません。一番先に表明した林氏には、直後に討論会への出席を要請し、当初予定していた日程の都合が悪いことが判明したために同氏の都合に合わせて日程を変更してきた経緯もあります。

詳細な質問項目は、3人目の候補者が表明した翌日に完成し、26日から27日にかけて3氏に届けました。質問の中で提案する政策に反対または意見が異なるなら、その旨を表明いただければいいことで、それが政策論争であり、市民に問いかけることだと考えます。

林氏が所属してきた市議会の「自民党真誠会」は「議員と市民の意見交換会」への参加を呼びかけても参加したことはなく、市議会の運営等についての市民参画や議会運営の透明化を求める請願にもことごとく反対してきた経緯もあり、基本的に「意見の異なる市民との対話」を避ける体質があるといえまません。

明石市の自治基本条例は「市民自治のまちづくり」を掲げており、「自治の主体は市民」と明記し、市政への市民参画を市政運営の第一に掲げています。市民も議員も多様な意見があります。市政運営は「議論と対話」を重ねて積み上げていくものである限り、意見の異なる市民との対話を拒否する人は、基本的に市長にはふさわしくあ

他市の市長経験者と明石市政に精通した市議、甲乙つけ難い政策論争を展開

公開討論会には130人余の市民や市議、職員らも参加し、2時間にわたって討論を展開した。

主催者側が用意した質問は、市民マニフェストに基づく12問。冒頭に立候補の動機や市長になってやりたいこと、市政が直面している重要課題などを話したうえで、「市長としての基本的な姿勢」や「中長期的な財政見通しと対応」「持続可能な循環型社会をめざした具体的な政策」について、主

催者側の質問に次々に答えた。

この中では、市長と議会との関係のあり方や、市長と職員の信頼関係づくり、巨額の公共事業である市役所新庁舎の建設計画、初期投資だけでも418億円と見積もられている新ごみ処理施設計画などの具体的な課題についても、それぞれが加西市での市長経験や市議として明石市政に8年間取り組んできた実績を踏まえて白熱した討論を交わした。

また、相互に質問して答える場面では、市長経験を持つ中川氏が「市長と市議に求められる能力の違い」を質したり、丸谷氏は「あちこちの選挙に出ていて、明石の問題にどれだけ精通しているのか」などを質して、互いの“急所”に直球を投げる場面もあった。

最後は会場から提出された25人の質問票から、①新庁舎②教育③自然環境④財政に関わる質問を双方に投げかけるとともに、それぞれに3つずつ質問するなど10項目を取り上げて30分にわたって答えてもらった。

討論会の翌日開いた世話人会では、公開討論会を検証して候補者の評価に関わる議論を行い、3つの論点を集約した。

一つ目は、自・公等への推薦を求めている候補が討論会に出席しなかった問題は、見解にまとめて発表し、市民にアピールする。

二つ目は、討論していただいた2名の候補者は、いずれも自治基本条例を遵守し市民参画に取り組むことを明確にしており、政策上でも大きな優劣をつけ難いと評価した。

三つ目は、討論会でも浮かび上がった大事な課題は、市民がもっと市政に関心を持ち市政に参画すること。もう一つは、具体的な政策課題を進めるためにも、自治基本条例を市民はもちろん職員や議員にも浸透を図ることが、何よりも大事なことが明確になったことだった。

立候補を表明した3氏(表明順)

はやし けんた
林 健太氏 (40) 明石市議

なかがわちようぞう
中川 暢三氏 (67) 元・加西市長

まるたにさとこ
丸谷 聡子氏 (59) 明石市議



(6) “泉旋風” 吹き荒れた3つの選挙と丸谷市政の誕生

まず県議選で泉派候補が驚異的な得票で議席確保、6選めざした元議長は落選

県議選はかつてない激戦になった。明石選挙区は定数4のうち長らく自民2、公明1と民主党や共産党で議席を占めてきたが、今年1月末に泉氏の明石市民の会が擁立した市議候補の一人を県議選に振り向けて波乱含みになった。さらに元民主党県議だった岸口実氏が前回維新公認で当選したが、昨年の参院選に維新から立候補して落選したあと県議に返り咲を狙っていた。また、前回維新から

◇県議選 (明石選挙区、定数4)

投票率 41.16% (前回 34.79) +6.37

- 橋本慧吾 (明石市民の会) 32,060
- 北口寛人 (自民) 16,195
- 伊藤勝正 (公明) 15,863
- 岸口 実 (維新) 15,922
- 松本隆弘 (自民) 11,390
- 伊藤和貴 (共産) 5,247
- 森 勝子 (無所属) 5,018

◇市長選 4/23 投・開票

投票率 48.80 (前回 46.84)

- 丸谷聡子 無所属 77,017
- 林 健太 無所属 36,944
- 中川暢三 無所属 4,995

初当選した女性市議がセクハラ防止を訴えて無所属で立候補するなど、7人の乱戦になった。

選挙戦では、泉派の橋本慧吾氏を泉氏を先頭に明石市民の会の市長、市議候補6人が全面的に応援演説に立ち、異例の選挙戦を展開した。選挙結果は別表の通り、橋本氏が初陣ながら3万票を超える驚異的な得票でトップ当選した。明石選挙区での過去の最多得票はせいぜい2万票前半半だから、突出ぶりが目立った。当選したほかの3人は過去の得票よりもやや減らし、6選をめざした県会議長経験者の松本は落選した。20年前には議席を確保したこともある共産党は前回1万票を割った後さらに5000票台まで減らした。

全国的にも圧倒的な人気を得ている泉氏のトリプル選挙への対応は、本人自身が「この選挙は私の選挙です。明石市長公認の候補です」と訴えた選挙戦だったが、退任する市長のこうした訴えが具体的にどこまで得票を伸ばすか未知数だった。しかし、統一選前半の県議選結果は、後半の市長・市議選を占う要素として陣営には大きな期待感が生まれ、対立陣営には戦々恐々の脅威が生じていた。

予想通りの丸谷圧勝、市議選も泉派勢の驚くような得票が並ぶ

統一選は従来から、後半の市長・市議選候補者にとっては県議選の10日間は選挙の事前運動ができなくなり、本番直前の空白期間が生じがちだった。しかし、泉陣営は県議選にも候補者を立てたことによってぶっ通しで「明石市民の会」の旗を立てて、後半戦の候補者が休むことなく街頭活動に出ずっぱりで訴えることができた。市長選で対立陣営の林候補も自民党の県議や市議らと一緒に、県議選中も一体で動いたが、泉派ほど一体感がなく集団行動の熱気では明らかな差がついていた。

選挙結果は予想通り、丸谷がダブルスコアを超える圧勝に終わった。神戸新聞の出口調査では、自民支持層の49%が丸谷氏に投票し、林氏に投票した47%を上回った。維新支持層も74%が丸谷に投票、支持政党なし層は76%が丸谷だった。林氏への投票が上回ったのは73%が林氏に投票した公明支持層だけだった。

一方、市議選は43人が立ち、前回の投票率を12ポイント近く上回る投票率になった。

明石市議選の過去の最多得票はせいぜい5000票超だったが、今回は5人全員が当選した市民の

◇市議選 4/23投・開票

投票率 48.80% (前回 36.99)

+11.81

①中川夏望 (無新)	12,658	市民の会
②山中裕司 (無新)	9,827	市民の会
③黒田智子 (無新)	8,660	市民の会
④金尾良信 (無新)	4,190	市民の会
⑤中西礼皇 (無元)	3,919	
⑥梅田宏希 (公現)	3,129	
⑦竹内きよ子 (無現)	3,116	
⑧辻本達也 (共現)	3,000	
⑨正木克幸 (維新)	2,909	
⑩石井宏法 (自現)	2,804	
⑪宮坂祐太 (無現)	2,737	
⑫中村茂雄 (維新)	2,703	
⑬榎本和夫 (自現)	2,649	
⑭千住啓介 (自現)	2,623	
⑮尾倉あき子 (公現)	2,620	
⑯上田雅彦 (維新)	2,576	
⑰辰巳浩司 (自現)	2,575	
⑱出雲有希子 (無新)	2,544	
⑲林丸美 (無現)	2,515	
⑳飯田伸子 (公現)	2,442	
㉑灰野修平 (自現)	2,424	
㉒山下祥 (無新)	2,395	市民の会
㉓高尾秀彰 (維新)	2,381	
㉔国出拓志 (公現)	2,292	
㉕長尾博子 (公新)	2,286	
㉖河村和歌子 (公新)	2,208	
㉗寺井吉広 (無現)	2,165	
㉘家根谷敦子 (無現)	2,149	
㉙三好宏 (自現)	2,104	
㉚井藤圭順 (自現)	2,041	
次・吉田秀夫 (無現)	1,982	
角和馬 (共新)	1,981	
大西洋紀 (無現)	1,825	
有野光洋 (維新)	1,729	
北川貴則 (無現)	1,427	
若村正順 (国新)	1,404	
岩本博吉 (参新)	1,390	
穂原成人 (無現)	1,322	
ふじやん (無新)	1,122	
横山伸吾 (無新)	953	
和田吉一 (無新)	290	
稲山安生 (無新)	286	
田中徹 (無新)	276	

◇市議会	定数 30	立候補 43人
	当選/立候補	党派別 当選/立候補
現職	17/21	自民 7/7
新人	12/21	公明 6/6
元職	1/1	市民の会 5/5
うち女性	10/10	維新 4/5
		共産 1/2
		無所属 7/16
		国民 0/1
		参政党 0/1

会の4人が上位4位までを独占し、上位3人は1万2000超、9000超、8000超と驚異的な票を獲得し、市民の会5人で得票総数の3割強を得た。上位3人はいずれも40代の女性2人と男性1人で、知名度もなく出馬を決めてから実質3カ月余の活動期間しかなかった。市長選も含めて、トリプル選挙に泉旋風が吹き荒れた得票と言える。

また、市議選は定数30に対して現職の出馬は21人と少なく、うち4人が落選したため現職の当選はかろうじて半数を超える17人とどまった。一方、女性議員も前回は1人上回る過去最多の10人と更新し、3分の1になった。公明党が

6人の内4人が女性になった一方で、最大会派の自民党候補は女性がゼロ。選挙後無所属の女性1人を加えて、会派として初めて女性議員を擁することになった。候補者5人を立てて4人が当選した維新は女性ゼロだった。

新議会の陣容は、改選前10名だった自民党が保守系無所属一人を入れても8人とどまり、自公で14人と過半数を割った。しかし、5月に行われた役員選出では尾倉あき子議長（公明）灰野修平副議長（自民）が自公とかがやきネット、維新ら23人の連携で選出され、泉派の5人で構成する会派「市民の会」が対立する構図が見えてきた。もともと、新市長は前市長とは異なり全ての会派の言い分を聴き、対立構図はつくらないとしていることもあり、具体的な政策や議案で市議会側がどのような対応をするかは、これからの課題でもある。

（7）選挙戦を振り返って、市民自治あかしの「選挙総括」

市民自治あかしは、丸谷市長選挙の担い手にはならず、選挙戦には団体として一步距離を置くとともに、メンバーの大半は個人としてそれぞれが選挙に関わった。しかも、最終的には選挙戦は泉氏を代表とした「明石市民の会」の泉選対が中心になって、市議選以来の丸谷選対がサポートして進めたこともあり、市民自治あかしは丸谷市長選挙の「選挙総括」をする立場にはない。

ただ、上記の選対が選挙と選挙結果を分析して報告書をまとめる可能性は薄いので「市民自治あかし」の立場から、一定の選挙総括をしておくことは必要と考える。

丸谷市政の誕生に期待するが、選挙戦には直接関わらない市民自治あかしの立場

市民自治あかしは丸谷氏が市長候補になることがほぼ確定した3/24、緊急世話人会を開き、選挙への対応について協議した。丸谷自身の市議選選対も3選目へ向けての準備を整えていた中で、直前に市長選出馬を聴かされた。世話人メンバーの一人として発足以来、市議になる前から関わってきたメンバーの突然の市長選立候補は、文字通り晴天の霹靂でもあった。

前年秋以降、泉退陣の動きがある中で、メンバーの中には市長選に打って出るべきであるという意見もあったが、泉再登板の可能性もある中でその選択肢は主要な議論にはならなかった。退任する泉市長の後継として指名されたことも大方のメンバーは予想もしなかったことだが、後継指名の理由や背景を聴く中で、ほとんど議論の余地なく立候補には賛成でまとまった。というよりも、この機会を「千載一遇のチャンス」として、一気に、本格的な市民自治の市政を進めることに誰もが期待感を膨らませた。

そんな中で3/29の市長選候補者公開討論会を経て、翌日3/30開いた第168会世話人会では、これまでの公開討論会の後議論してきたと同じように、討論会を踏まえた評価と個別候補の検証を行った。いわば、3人の市長候補の中で「誰が市長にふさわしいのか？」という検証を踏まえて、選挙本番へ向けて市民自治あかしがどのような対応と行動をとるのか—という議論だった。

13人の世話人による議論は、突っ込んだ議論になった。その中から取りまとめた結論は、以下のように集約した。

- ①欠席した林健太候補については、欠席理由も折衝経緯から見ても「市長候補としては論外」であることを明確にする。（見解をニュースに発表）
- ②討論会に出席した丸谷、中川両氏は、討論会で示した政策上の大きな優劣はなく、2人とも「自

治基本条例を遵守する」ことを明確にし、市民参画の市政を推進することを明らかにしたことは、高く評価できる。

- ③選挙も含めて今後大事なことは「市民がもっともっと市政に関心を持ち、参画する」ことと、「自治基本条例の浸透を図る」ことである。
- ④市民自治あかしは丸谷市政が実現することを望むが、公開討論会を主催した立場や今後の「市民検証」を続けていく使命があり、団体として支援はするが、選挙の主体にはならない。メンバー一人ひとりが個人として関わるにとどめる。
- ⑤選挙戦に向けては、以上の観点から選挙の構図や歴史的意味合い等についての「論評」を、松本が執筆し発信する。(論評・2023 明石市長選挙 4/6～5/4 8回)

この方針をさらに選挙告示を控えた 4/7 の世話人会では、「団体としては前へ出ない。メンバーは個人として個々に支援する」「市民自治あかしはこれまで、選挙で誰かを支援する対応はしてこなかった。団体としては今回も、特定候補者を支持する立場にはない。当選したらこれまでの延長線上で、市民自治の市政を実現するために努力する」ことを再確認した。

丸谷氏が泉氏の後継指名を受けた背景と理由、市民自治の市政「第2ステージ」へ

泉氏が記者会見で丸谷氏を後継者と指名し、選挙戦を通じて自ら明らかにした理由は、以下のようなものだった。泉氏は「丸谷さんは決して泉支持の議員ではなく、むしろ私にはきつい議員だった」と繰り返している。彼女に注目したのはこの2年ほどの議員としての働きぶりだったという。

最大のインパクトは、一昨年秋から、丸谷氏が先頭に立って動いた明石公園の「樹木の過剰伐採」問題だった。最初に声を挙げて、市長も立ち上がるように訴え、自ら専門家や市民を交えた団体を組織して署名を積み上げて、伐採中止を市長や県に迫った。共感した泉氏が丸谷氏らと一緒に県への抗議行動に動き、ついに昨年4月には知事が「伐採中止」を表明し、県立公園のあり方検討会が始まった。

泉氏はこうした丸谷の行動力について、大久保北部丘陵地の自然林を保全・再生し、子どもたちの野外活動の森にしていく運動でも高く評価していた。これも彼女が中心になってグループが活動を始め、市長や関係部局にも働きかけて「子午線の森」と名付ける「野外活動の拠点」を実現した。市長も彼女に誘われて、自ら開墾のボランティア活動の現場に赴き、目と足と体で実感したという。

また、公設民営の「あかしフリースペース・トロッコ」と名付けた18歳までの「子どもたちの居場所」を市中心部にある古民家を見つけて、運営する専門スタッフたちもそろえて開設にこぎつけた。

議員活動の傍ら、こうした活動を次々にこなして今日の社会的課題を解決していく実行力に、市長は注目していたという。加えて、泉氏が強調したのは「自分はトップダウンで人の言うことも聞かず失敗も多かったが、彼女は自分とは真逆の性格でボトムアップ志向。みんなの意見を聴いて、うまくまとめていくくれるはず」と評価していた。丸谷市長は就任後、職員訓辞でもその点を強調し、さっそく「まるちゃんポスト」(市長への意見箱)や「まるちゃんカフェ」(タウンミーティング)などの対話とボトムアップの仕組みを打ち出し、所信表明でも強調した。

世間では「引退した泉氏が“院政”を敷く」という邪推が少なくなかった。これについて丸谷氏は後継指名を受諾する際に、一つだけ念押ししたことがある。「泉市長の良くなかったことは、改めていきます」だった。泉氏は「退任したら、もう一切口出ししない。好きにやったらいい」と世間にも広言した。

こうして、丸谷氏は「前市政のいい政策はしっかり継承し、悪いところは改めていく」と新市政をスタートさせた。

「この選挙は泉の選挙」とトリプル選挙に“旋風” 選挙のやり方への批判と黙認

選挙戦は一貫して、泉市長(4月末までは市長)の采配の下で行われた。丸谷立候補が決まった際に、市議選時代からの「丸谷選対」は急遽、市長選への態勢の転換と強化を志向したが、ほどなくそ

うした対応は中止した。市長選も泉氏の采配の下で「明石市民の会」の政治団体が担うことが決まったからだ。市議選仕立てだった丸谷選対も、その傘下に入って動くことになった。街頭では泉氏自ら「これは私の選挙です」と言い切った。陣営内部では「まるちゃんの選挙とは違う」という戸惑いや違和感もあったが、「それで当選できるなら」とそれぞれが飲み込んだ。

率直に言って、統一選前半の県議選の結果が出るまでは「辞める市長が前面に出た選挙で、泉票がついてくるのか？」という不安もあったが、県議選の圧勝を見て懸念は吹っ飛んだ。同じことは対立陣営にもあった。陣営の中では、県議選に続く圧勝を予感する見方が少なくなかった。出口調査による得票分析から、明らかだった。

圧勝した丸谷陣営にとっては、4年後の選挙が大変になる。市長選を担える選挙態勢の経験がない中で、次の選挙には「泉旋風」はない。市民派市長の評価がこれからの4年間で浸透すれば、その不安もなくなるかもしれないが、いずれにしても4年後の選挙は“未踏の選挙”に踏み出すことになる。

「第2ステージ」の中身とは何か？ これから始まる模索

選挙終了2日後の4/25開いた世話人会では、選挙結果を踏まえた今後の方針についての議論を始めた。議題は、①選挙結果についての評価 ②市議会はどう変わるのか ③市民自治あかしの新しい市政へのスタンスをどうするのか ④当面する緊急課題になる政策課題 ⑤市民自治あかしの活動方針や市政へのスタンスについての見通し——等々について議論を開始した。

選挙結果については、以下のような集約がなされた。

- ① 超短期決戦の選挙になり、勝つためには泉市長の看板で突っ走るしかなかった。そもそも「後継指名がなければ市長選に出なかった」ことから、前代未聞の選挙戦を是認せざるを得ない。
- ② 4年後の選挙は、今回とは全く異なる選挙になる。
- ③ 泉旋風に加えて、丸谷自身の資質と能力が加わり、圧勝した。
- ④ 泉氏の選挙戦略等については、さまざまな見方があった。
- ⑤ 対立候補は「自公が束になって…」と言うには程遠い実態にあった。
- ⑥ 今後は「市長の立場」と「市民の立場」が異なることを、改めて意識しなければならない。新市長は「市民のパートナー」をどう形成するか？ 市民はステイクホルダーのあり方を見つめる必要がある。

選挙後、市民自治あかしは「市民自治の明石市政は第2ステージに入る」ことを発信してきた。12年前の泉市政のスタートが市民自治の市政「第1ステージ」とすれば、丸谷市政は市民自治の市政をさらにステップアップする「第2ステージ」に入るという位置づけだ。ただ「市民自治の市政」はまだ現在進行形であり、模索の段階にある。新しい市政の誕生自体は、十分練られたうえでの到達ではなく、突然降って湧いたに等しい。その中身はこれから、市長をはじめ市民が共に模索していく課題でもある。このような認識のもとに、5/9の第71回世話人会では突っ込んだ議論を重ね、第2ステージについて、以下のような確認を行った。

- ① これまではどちらかと言えば、市政に対して要望、要請、提案する役割を果たしてきたが、これからは自治基本条例にあるように「自治の主体は市民である」（第5条）に沿って、名実ともに「市政をリードする市長」とともに「市民自治のまちづくり」を担っていく役割を果たさねばならないことを、あらためて認識する。市民自治あかしの活動も「第2ステージ」にふさわしい活動を展開していく必要性を共有する。
- ② 市長と市政を支え、市民自治の市政を推進するパートナーとして政策課題や市政運営に参画と協働していく活動をより一層強めていく。すでに新市長が打ち出している「タウンミーティング」はじめ市政と市民の合意形成を推進するため市民の受け皿機能を整えていくことも重要。
- ③ 30万全市民の代表である市長と、私たち市民の立場は時には異なることもあり得ることを確認し、政策提言市民団体としての市民自治あかしの独自性は大事にしていく。

④市政の各分野についての政策検討能力を高めるためにも、市民自治あかしのメンバーのすそ野を広げ、財政も含めたほか専門的識見を有する人たちとの連携を強めていく。

⑤新しい議会の構成や動向を見守りながら、「市民と議員の意見交換会」などの開催を通じて議会との関わりも強めていく。

この時点で、私たちは文字通り「新しいスタート」地点に立ったという確認をした。

2. 市議会が変わったか？

かつてない注目選挙の結果、議会構成にも変化

今回の選挙では従来にも増して、市議会がどう変わるかが注目された。市議会選挙がこれほど注目されたのは、近年にはない。その証拠に、前回 2019 年の選挙では市長選が無投票当選になり、市議選単独選挙になったこともあり、投票率は 36.99%と断トツの過去最低に落ち込んだのが、今回は 12ポイント近くも上昇し、48.8%に回復した。

定数 30 に 43 人が立候補し、現職が新人の候補者数を下回ったこともあるが、泉氏が「自公勢力を過半数以下にする」と自派の新人候補を 5 人も擁立し、得票総数の 3 分の 1 余りを占めて、驚異的な得票で上位 4 人を独占したことだ。

選挙結果も現職がかりうじて過半数の 17 人とどまったのをはじめ、女性議員も前回からさらに増えて 3 分の 1 の 10 人になった。最大会派の自民党は現職 7 人に保守系無所属女性新人を加えて 8 人としたが、公明の 6 人を加えても半数に至らなかった。5 月の役員選挙は他の 2 会派等も加えて正副議長を確保したが、対決姿勢だった前市長と異なり「対話路線」を打ち出している新市長との関係はどうなるかは、今後の政策をめぐる議論の推移を見なければ分からない。

すでに 6 月議会の一般質問は過去最多の 25 人が質問に立ち、質問しなかったのは正副議長を除いて 3 名に過ぎなかった。質問と質疑の中身を見ると、自民党会派の議員が表向き“対決姿勢”を見せている半面、質疑の実際からは“様子見”の感じが否めない。公明も含めて他の会派の質問は一部を除き総じて対決姿勢よりも政策議論を中心としたもので、変化の兆しも読み取れる。新市長の所信表明も具体的政策課題を前面に出さず、「対話路線」の基本姿勢に徹したこともあり、議会と市長の関係が顕在化するのには 9 月市議会以降に持ち越された感がある。

多数派支配、少数派冷遇の体質はいぜん続く

とはいうものの、近年顕著な議会運営の悪弊だった「多数派支配、少数派冷遇」という議会基本条例の趣旨に反した議会運営は、相変わらず変わっていない。

改選前に比べて会派構成は自民 8、公明 6、市民の会 5、かがやきネット 4、維新 4 と一人会派 3（共産、対話の会、スマイル）と変わり、一人会派は 3 つに減った。しかし、議運委や代表者会、特別委員会（現在はなし）や議会改革推進委員会の構成は、かつての「議運委の申し合わせ事項」に沿って、3 名以上の会派に限定し、改選前は少数会派が多かったこともあり「少数会派の代表」を一人入れていた議会改革推進委員会の構成メンバーから少数会派を締め出した。市民の会の代表が代表者会でこれに反対したが、多勢無勢で押し切られた。

議運委や特別委員会も含めて、多数会派だけで議会運営を進めるのは、明らかに議会基本条例の趣旨にも反しているが、こうした議会運営は自公で圧倒的多数を占めていた改選前と同様に続いている。

そもそも、「議会運営委員会の申し合わせ事項」なるものは、継続案件同様に議会の改選でリセットされるものであるはずなのに、連綿と引き継がれている不思議な議会である。今回の改選では現職議員は半数強の 17 人しかいなく、半数近い 13 人は新人議員である。しかも、「申し合わせ事項」の多くは前回以前の改選前から連綿と引き継がれていることが多く、申し合わせに関わった議員は一部しかいない中での“亡霊”のような申し合わせに議会全体が縛られている不思議な存在である。